

Jane Austen: Becoming an “Author” ——ジェイン・オースティンの「語り」と「教育」——(2)

惣谷 美智子

『分別と多感』

『ノーサンガー・アベイ』に続く『分別と多感』では、拙論(1)*において議論してきたような『ノーサンガー・アベイ』の語りの戦略、つまり会話の手法は、飛躍的に進歩する。この作品では、謎かけは「作者(の長弁舌)」対「読者」ではなく、むしろ「登場人物」対「読者」になる。しかし、それは作者が読者に向かい合うような直接的語りではない。登場人物たちは、読者のほうには見向きもしないで、登場人物間同士の会話に専念し、読者は彼らのそばでひたすら聞き耳をたてるだけである。つまり読者は、アン・ゲイリン(Ann Gaylin)の用語でいえば、一種の「立ち聞き」(“eavesdropping”)状態におかれ、そこでは読者のもっぱら解釈行為に精を出すことになるのである。ゲイリンは言語学者グレアム・マグレガー(Graham McGregor)の研究を引用して、「聞き手自らが物語を創り上げること」の重要性を指摘している。つまりマグレガーの研究成果によれば、「立ち聞きするとき、聞く者の反応の3分の2以上は解釈行為で占められており、重要なことは、そうした解釈行為の大半が漏れ聞いた会話の筋道を通すため、聞き手自らが物語を創り上げることからなっている」(Gaylin 27)というのである。

厳密にいえば、オースティンの会話の場合は、当然、現実の立ち聞きとは異なる。それは作家により読者に100パーセント聞き取り可能なものとして示されるのだが、それでも、オースティンのアイロニーは神出鬼没で、どこに潜まされているか油断がならない。それらに耳を澄ませて作家の内緒話を聞き取ろうとする読者側の「解釈行為」は、積極的にならざるを得ないであろう。ここでは作者が故意に声をひそめ、読者はなおさらに解釈行為へと身を乗り出してくることになるのである。

『分別と多感』における会話の手法に関しては、すでに考察したことがあるので(惣谷『共謀者』110-31)、いちおう、代表的な会話だけ簡単に紹介し、本論では、新たにホームズの社会言語学とロビン・ダンバー(Robin Dunbar)の進化人類学といった現代における研究をそこに交差させてみたい。

『分別と多感』における会話といえば、ジョン・ダッシュウッド(John Dashwood)夫妻の会話(vol. 1, chap. 2)は代表的なものであろう。夫ジョンは亡父の遺言もあり、また世間体も考慮して、義理の妹である主人公のエリナ・ダッシュウッド(Elinor Dashwood)たちに3,000ポンドを与えようと妻に提案する。こうしてはじまった二人の対話は、妻側の“Certainly”, “To be sure”, “Undoubtedly”, そして夫側の“That is very true”, “I believe you are right”というように、対話者同士のもっぱら同意の言葉で進行していくのだが、われわれ読者が最後に取り残されるのは、作家の会話のレトリック(トリック)によって生じた文字通りの“hole”でしかない。というのも、夫により当初、提案されていたはずの「3,000ポンド」は最後には跡形もなく消失して無に帰してしまうからである。

こうしたマジックが可能であるのは、とりもなおさず巧妙に張り巡らされた罠、エリナたちが“no carriage”, “no houses”, “hardly any servants”, “no company”という、ないない尽くしの、切り詰めた生活スタイルに甘んずることができれば、という(エリナたち当事者の意向をまったく無視した、この妻のよって周到に捻り出された)付帯条件ゆえである。そして妻は最終的に、エリナたちには「いかな

る支出の必要もありえない」と結論づけるのである。会話の側面で見れば、妻の夫に対するこの偽装の同調は、夫を説得するというよりは、むしろ対話相手である夫の意識下にある我欲を、妻が代弁する、という会話の技巧によって成り立っている。

対話者同士の緊密な意識を張り巡らせることによって構築されたこうした会話は、オースティンの技巧に特徴的なものであり、独特の文学的効果をもたらすものであるが、それはある意味、たとえば前述したような、現代におけるホームズの社会言語学的な研究成果（惣谷「『語り』と『教育』」(1)）を先取りするものとしても読み取り可能である。以下にホームズの論文から、男女の会話における性差についての言及を一部引用してみよう。

Researches analyzing the functions of different utterances have found that men tend to contribute more information and opinions, while women contribute more agreeing, supportive talk, more of the kind of talk that encourages others to contribute. So men's talk tends to be more referential or informative, while women's talk is more supportive and facilitative.

Overall, then, women seem to use talk to develop personal relationships and maintain family connections and friendships more often than to make claims to status or to directly influence others in public contexts. (45)

ホームズの議論を透かしてダッシュウッド夫妻の会話をみてみれば、この夫婦の談話にも、ホームズの指摘する「男の談話」 (“men's talk”) の様相がいくぶんみられる。困窮する身内を援助しようという彼の申し出には、彼自身の誠意というよりは、むしろ世間体に対する思惑のようなものが見え隠れするからである。夫の言葉には社会的地位を目指したそれを確保するための、世間への取り繕いが見間違いない形で出ており、それはまさしくホームズのいう“public talk” (44) の延長上にある。他方、妻といえば、彼女もまた、ホームズの議論のなかで明快にされた「女の言説」 (“women's talk”) のルールを忠実に踏襲している。彼女は踏襲し、かつその強みをしたたかに利用している。彼女の「領き」、「力づけ」は、話し相手である夫を会話に引き入れるのみならず、確実に自分自身の魂胆へと「水を向ける」 (“encourage”) ものものであるからである。

なるほど妻側の論理でいけば、「3,000 ポンド」をゼロにするどころか、マイナスにすることさえ可能であろう。生活を切り詰められ「お金の使い道のない」状況に追いやられたエリナたちは（妻の言葉を借りれば、まさしく）「あなた（夫）のほうにこそ、なにかしてくれてもよさそうなもの」 (“They will be much able to give you something.”) (12) だからである。彼女の会話が目指すのは、夫が持ち出した「3,000 ポンド」（という「提案」）を、単にゼロ地点にまで貶めるだけではない。それより先にある「マイナス」という、話者たちにとっては、安全のダメ押しを約束するはるかな地点にまで追いやってしまうことである。妻は、たとえばバルトの言葉を借りればまさに「最後の言葉」 (“the last word”) (Barthes, *Discourse* 207-208) の獲得者となる。つまり意味を支配し、かつ打ちのめし、これまでいわれてきたことすべてに対して運命を決する人となるのである。⁴ こうしてオースティンが創造した「妻」は、「夫」に対して圧倒的勝利を収めるのだが、この妻の勝因に関しては、社会言語学のみならず、現代科学の他の分野、たとえば人類学的見地からも興味深いサポートが得られるだろう。言語の発生自体が女のゴシップに源があったという仮説である。

進化人類学者ロビン・ダンバーによれば、そもそも言語というものは、「音声を使った毛繕い」 (“vocal grooming”) を起源としていることになる。つまり類人猿の群れは、規模が増大するにつれて「肉体的な毛繕い」 (“physical grooming”) という、従来の類人猿同士のコミュニケーションの手段としてあったものでは、対処しきれなくなるのだが、それを補うために「音声を使った毛繕い」 (“vocal grooming”)

(115)、すなわち究極的には言語、というものが出現してきたというのである。こうしたダンバーの仮説が真実であるとするなら、「毛繕い」の進化として発生した言語が、内容的には、雄同士の狩猟のための情報伝達であるよりは、実はむしろもっと社交的意味合いをもつ雌同士のゴシップにその源があるとするダンバーの説も頷けよう(79, 149)。⁵

If females formed the core of these earliest human groups, and language evolved to band these groups, it naturally follows that the early human females were the first to speak. This reinforces the suggestion that language was first used to create a sense of emotional solidarity between allies. . . . among modern humans, women are generally better at verbal skills than men, as well as being more skillful in the social domain. (149)

もし、こうした進化人類学者の憶測を信じるとすれば、ダッシュウッド夫人が論争の勝者となることは言語の発生的観点からも理にかなうことになるだろう。ここでは彼女の話術が、夫という「同盟者間の連帯感を生み出す」のに最大の効果を発揮するのである。

こうして200年前にオースティンが構築した世界は、現代の科学によっても裏付けされようとする。だが、もし科学というものが、人間が古くから漠然と感じ取っている経験知、暗黙知のようなものを、さらに厳密かつ直接的な言葉で再発見する営みであるとするならば、オースティンの文学もまたある点では、そうしたもの、つまり人間が日常の生活を通してすでに了解ずみの経験知、暗黙知といったものを再発見する営みであるといえるかもしれない。ただし彼女の場合、その再発見の過程は、おそらく通常の科学とは逆のものになるだろう。それはむしろ「厳密かつ直接的な言葉」を骨折って避けることによってなされる類のものだからである。彼女は「作家」として書くことによって再発見を試みている。しかもその「再発見」は、解釈行為を通して読者をもまた巻き込むものであるのだ。

オースティンによる会話の扱いの例をもう一つ挙げれば、エドワード・フェラス (Edward Ferras) をめぐって恋のライバル同士となるエリナとルーシー・スティール (Lucy Steel) の対話 (vol.2, chap. 2) がある。そこでは、対話の相手を探りつつ、自らは決して探らせない、という会話の人為的な一方通行を謀る極意が惜しげもなく開示され、両者の会話では、いわば腹に一物ある者同士の会話指南書の趣すら呈する(惣谷『共謀者』119)。それはたとえば以下に引用するような、M・メルロ=ポンティ (M. Merleau-Ponty) の指摘する「対話の本質」を反転させる。

In the experience of dialogue, there is constituted between the other person and myself a common ground; my thought and his are interwoven into a single fabric, my words and those of my interlocutor are called forth by the state of discussion, and they are inserted into a shared operation of which neither of us is the creator. . . . we are collaborators for each other in consummate reciprocity. (357)

メルロ=ポンティのいう、対話者同士の「協力関係」をオースティンは、反転させ、陰画にしてみせる。ここで展開されるエリナとルーシーの会話は、前述したダッシュウッド夫妻の場合のような同志である相互利益者間、つまりメルロ=ポンティの言葉を使えば、「完全な互惠関係のうちにある協力者」(“collaborators for each other in consummate reciprocity”)間のものではない。否、それどころか、彼女たちの敵対関係はそれとは対極にある。しかし、そうした陰画はまた新たな意味を帯びはじめてきはないか。ある意味で彼女たちは依然「協力者」であることには変わらない。というのも、エリナ、ルーシーという好敵手同士の緊密な関係性は、新たに言葉の熾烈な闘技場の様相を形づくりはじめ、テクストの文学効果の産出、という点では、作者の「協力者」、しかも「無類の協力者」になるからである。

『高慢と偏見』

ここで議論を『高慢と偏見』にまで進めよう。上記のように対話の技法は『分別と多感』でほぼ確立するのだが、オースティンの前期作品の最高峰『高慢と偏見』にいたって、バルトのいう「選択」と「骨折り」にはさらに磨きかけられることになる。その極致は、疑いもなく『高慢と偏見』冒頭の最初の一節だろう。これは厳密に言えば、会話ではない。作者自身の語りである。しかし、それは非常に「会話」的である。というも、作家は、読者の反論を承知で、否、その反論をこそ頼みとして、言葉を投げかけているようなところがあるからだ。オースティンは実は世間の下世話な思惑の陰にまんまと身を隠し、またもや読者を相手に対話をはじめるのである。

i. “Rightful Property”

2人の「教育者」——オースティンとサミュエル・ジョンソン

『高慢と偏見』冒頭の一節は、この作品のみならず、「オースティン」を語る際の一種の リチュアル 儀式 と化しており、ここでことさらに引用するのも躊躇されるのだが、このフレーズほど「オースティン」を語るにふさわしいものは他にあまり例を知らない。ここにはいわば常に息を吹き返すのを待ち構え潜んでいる生き物のような多義性（めいたもの）がある。たとえばこのくだりに、試しに一つの視点、「サミュエル・ジョンソン」（“Samuel Johnson”）を投じてみればどうだろう。ジョンソンはいわずと知れた18世紀後半のイギリス文壇の中心人物で、彼の編纂による『英語辞典』（*A Dictionary of the English Language*, 1755）は、その後1世紀以上に亘って辞書編纂の要となった。そうした知の巨人ともいえるジョンソンの個性溢れる人物像は、彼を師と慕うジェイムズ・ボズウェル（James Boswell）が著した『サミュエル・ジョンソン伝』（*The Life of Samuel Johnson*, 1791）によるところが大きいのだが、その伝記はまた、教育者ジョンソンの言葉をく生徒であるボズウェルが書き写した、いわば講義録の趣も呈しているのである。ここでは「著述家」としてのジョンソンと、「作家」としてのオースティンを比較してみたい。結論を先取りしていえば、両者は究極的にはまた「教育者」にもなるだろう。

まずは、『高慢と偏見』の冒頭からみてみよう。

It is a truth universally acknowledged, that a single man in possession of a good fortune, must be in want of a wife.

However little known the feelings or views of such a man may be on his first entering a neighbourhood, this truth is so well fixed in the minds of the surrounding families, that he is considered as the rightful property of some one or other of their daughters.(3)

オースティンに対するジョンソンの影響、あるいは文体としての Johnsonese はよく指摘されるところだが、上に挙げた引用の最後の一文、つまり、財産ある独身男性が近隣の娘たちの「正当な所有物」とみなされるくだりについてオースティンの“rightful property”を、ジョンソン自身のいう“property”と並列してみよう。オースティンのく生き物>はさっそく呼吸をはじめるように思われる。オースティンのこの一節はそれだけで十分、興味深いのはいうまでもないのだが、ここでのテーマ（「著述家」と「作家」）の観点から「ジョンソン」を投入してみると、発散する意味はさらに巧妙なものとなる。

“No man is by nature the property of another.” (Boswell 619) ——これは、（スコットランドで黒人奴隷の弁護をすることになった）ジェイムズ・ボズウェル（James Boswell）の求めに応じて、ジョンソンが論証を口授、つまり口移しで教示したものの一部であり、師であるジョンソンは奴隷制度に反対する自らの真面目な信念、意見を弟子のボズウェルに教示する台詞である。

“It must be agreed that in most ages many countries have had part of their inhabitants in a state of slavery; yet it may be doubted whether slavery can ever be supposed the natural condition of man. It is impossible not to conceive that men in their original state were equal . . . Inhabitants of this island can neither gain riches nor power by taking away the liberty of any part of the human species. The sum of the argument is this:—No man is by nature the property of another . . .”(September 23, 1777)(Boswell 619)

「何人も、本来、他人の所有物ではない」という、奴隷を念頭においたそのジョンソンの考えかたは至極正当なものである。しかしオースティンにかかる、そこにはいささかの変更が付け加えられる。つまりジョンソンのいう「何人も」からは、「財産ある独身男性」が、大っぴらに除外されてしまうのである。オースティンが、ジョンソンの言葉とされているこの一節を実際に読んでいたか否かは別にしても、⁶ 当時、ジョンソンの言説に親しんでいたと思われる一般読者にとっては、この“property”をめぐるオースティンのパロディ的効果は相当なものであったろう（惣谷『Web 英語青年』34-35）。現代の一般読者にとっても、これら二種類の“property”が並列されれば、同様の効果が実感できる。ここでは巨軀ジョンソンのスケールも、この「痩せっぽちの女の子」(Garrod 40, 惣谷 “A slip of a girl”)であるオースティンによって一気に縮小されてしまう。ジョンソンのこの言及は直裁で、良識的な、まさしく「著述家」的意味合いをもつものであるのだが、それは、オースティンの「作家」的な言説（エクリチュール）と並列されることによって、見事に、いわば「食われて」しまう。オースティンの言説は「ジョンソン」（の信念）を内に包含することによってさらに強靱なものとなるのである。

ジョンソンの言葉は確かに何人も反駁できない良識であり、崇高な真理である。他方、オースティンのパロディは、現実である。あるいは、こういい直すべきであろうか。オースティンのパロディは、「普遍的真理」である。オースティンの言葉は、だれしも認めざるをえない、確固たる「普遍的真理」となる。知の巨人、ジョンソンの正当な「普遍的真理」に対してさえ、オースティンは独自の「普遍的真理」を打ち立てることができるのである。

しかし（いわずもがなのことではあろうが）こうしたパロディは単なる揶揄ではない。それはむしろ逆に、ジョンソンの主張する「万人の平等」、ジョンソン自身の言葉（とされるもの）でいえば、「何人も、本来、他人の所有物ではない」に込められたジョンソンの信念にさえつながるものであるかもしれない。なるほど若い娘たち（あるいは、娘たちの親）の魂胆の卑俗さは、世俗的で功利的に響く。そこには作者であるオースティン自身の魂胆も当然読み取れて、読者から笑いを引き出すのだが、しかし、それは同時に一笑に付すべきものでもないように思われる。「財産ある独身男性」（“a single man in possession of a good fortune”）の確保は、なるほど彼女たちの卑俗な世知にちがいない。しかしそれなしでは娘たちは自らの存在も危ぶまれる状況にいるのだ。これは、ジョンソンが奴隷に関して提起した問題にさえ通底するものであるかもしれない。この娘たちもまた、奴隷同様、はたして人間が本来あるべき「自然の状態にいるのだろうか」。『高慢と偏見』のこの一節は一方では、読者の笑いによって、いわば消費されながらも、他方では、陰画として当時の女たちの境遇をいみじくも焙り出していないかっただろうか。もしそうであるとするなら、オースティンの＜小説＞は、ジョンソンの言説、大原則に対する、細則のようにも読み取り可能となろう。なるほどそれはささやかな、文字通り「小さな説」でしかない。だが、読者に問いを發する＜小説＞であるのだ。オースティンの「著述家」のしぐさ、それは当然ながら擬態であり、後続で正体を現した「作家」性（パロディ）によってたちまち覆される。しかし、そうした転覆こそオースティンの狙いであり、そして「著述家」がいわんとする根幹を確かに伝えもすることになる。オースティンの教育観、そのメッセージはここでは骨太の「象の牙」(Ghent 100)

性を露わにしてくるのである。確かにいつの時代においても自由は人間にとって重要なものであったろう。奴隷にとっても、そしてまた女性にとっても。

会話の技巧に関していえば、オースティンが文字通りの「会話」を仕掛けるのは、上記のような擬態としての著述家のしぐさの直後である。『高慢と偏見』第1章は、ページも指摘するように、幕が上がると客間が現れ、登場人物のベネット夫妻が浮かび上がってくるといった演劇的效果を醸し出しているのだが(115)、会話に関しても、冒頭文を引き継ぐ形で展開されるベネット夫妻の会話は卓越しており、ここでは夫妻の絶妙な関係が構築される。妻ひとりが面白いのではない。また夫ひとりが面白いでもない。ここで醸し出される妙味は、両者の相互作用、相乗効果、一種の化学反応、あるいは端的に「間」^まといってもよいようなものが大きく作用している。そしてそれもまた極めてジョンソンのような。というのも『ジョンソン伝』で展開される、ジョンソンとボズウェルの掛け合いは、対話者同士の関係性をも描出せずにはおかないのだが、オースティン描くところのベネット夫妻の会話もまた、この中年夫婦の関係性を見事に透かしてみせるからである。

ii. “Vocal Grooming” & “*plaisir du sexe*”

『高慢と偏見』では会話はさらに広範になる。ベネット夫妻により口火を切られた会話は、直接対話、第三者としての会話の立ち聞き、そして噂へと多様化し、それら自体がそれぞれの人物を描き出しプロットを推し進めるようになる。たとえば直接対話は、エリザベスの場合、ダーシー、ジェイン、シャーロット、レディ・キャサリン (Lady Catherine)、ベネット氏、コリンズに対して繰り返され、第三者としての立ち聞きでは、常に聞き耳を立てているシャーロットの得意技が披露され、また噂に関しては、ベネット夫人のもっぱらの情報源、生きがいともなる、といった具合である。

もし前述したダンバーの憶測が正しいとすれば、つまり、言語とはもともと「肉体的な毛繕い」であったものが「音声による毛繕い」へと進化、発達したものであるとするなら、そしてそのゆえに言語の内容もまた、従来考えられてきたように、雄同士の狩猟のための情報伝達であるというよりは、むしろもっと社交的な雌同士のゴシップを起源とするものであるとするなら、ベネット夫人の存在など、ダンバーの仮説の、いわゆる 生きたエビデンスならぬ、フィクション上のエビデンスとなろう。さらにベネット夫人がはまだ発達途上にある未成熟な人間であることを考え合わせれば、この登場人物にダンバーの仮説のみならず、あのヘッケル (Ernst Haeckel) の仮説「*個体発生は系統発生を繰り返す*」 (“*Ontogeny recapitulates phylogeny.*”) さえ連想し、論理の飛躍を楽しむ読者もいるかもしれない。

ともあれ、そうしたベネット夫人のようなく原初的>人物はさておくとして、エリザベスをめぐる会話の手法を考えた場合、その会話をめぐる状況はかなり複雑である。もっとも端的な例を挙げれば、この作品の要となる「高慢」と「偏見」が芽生える状況自体がかなり入り組んでいる。この場面では直接対話ではなく、まず第三者間 (ビングリーとダーシー) との会話があり、その会話をエリザベスが漏れ聞くところから話が始まるのである。

... Mr. Darcy had been standing near enough for her to overhear a conversation between him and Mr. Bingley, who came from the dance for a few minutes, to press his friend to join it.

... “She is tolerable; but not handsome enough to tempt *me*; and I am in no humour at present to give consequence to young ladies who are slighted by other men. You had better return to your partner...”

Mr. Bingley followed his advice. Mr. Darcy walked off; and Elizabeth remained with no very cordial feelings forwards him. (11)

「ほどほどというところだが、こちらの気をそそるほどの美人じゃない」——これはダーシーの有名なエリザベス評だが、それはゲイリンがいうようにエリザベスに対し、直接、語られたものではない。それは友人ビングリーとの会話の中で口にされたものである (29-30)。(もっともこのダーシーの言説も、単に若い女性を対象にしたダーシーの素朴な品定めというよりは、ホームズの主張する、男の“public speech”とも興味深い関連性が見出せそうであるのだが、議論の拡散を避けるため、ここでは詳述しない。)ともあれ、この場面におけるオースティンの作家的工夫に関していえば、エリザベスがダーシーに対し、偏見を抱くことになる、そもそもの発端は、彼女がダーシーのこの台詞を立ち聞きすることにある。このように『高慢と偏見』では冒頭部ばかりでなく、主人公たちの「高慢」と「偏見」の重大な契機となる導入部が「会話」(しかも、文字通りの、立ち聞き)にまかせられる。そして作家としてのオースティンは、ここでは最後に一言漏らすのみである。「...そしてその場に留まったエリザベスは、彼に対して温情溢れる気持ちをもったというわけではなかった」——ここではオースティンの作家としての声は、“no very cordial feelings”という、緩徐法の微かな揺れに委ねられてしまう。作者は黙し、読者もまた「その場に留まる」ほかない。エリザベスと同様である。

この場においては、読者に対する作家の弁舌の質がいささか変化してきている。『ノーサンガー・アベイ』における作家の読者に対する弁舌、それはおそらく読者に対する以上に、作家自身への貢献としてあっただろう。おそらくこの若い作者は思いのたけを筆にまかせる爽快感を享受していたにちがいない。それがここでは実に慎ましい様相をみせることになる。『ノーサンガー・アベイ』では、「女性の無知」推奨にみられたように、オースティンの「作家」性というものは、主に作家自身の語り、弁舌として発揮されていたのだが、それが『高慢と偏見』にいたると、会話に、あるいは(たとえば上記の緩徐法にみられたように)寡黙さへと、収斂されていく観がある。

オースティンは、ここでは読者の「解釈行為」という、いわば「テキストの快樂」(“*plaisir du texte*”)の幅をさらに広げるために、作家としての「骨折り」を選び取っているのだが、そうした意味で『高慢と偏見』は、後期作品への飛躍の可能性をたぶんに含んだ作品となるのである。⁷

以下に『ノーサンガー・アベイ』と『高慢と偏見』の終盤近くを取り上げ、両作品におけるオースティンの「作家」性の違いを比較することで本論の結びとしよう。まずは『ノーサンガー・アベイ』からである。

I must confess that his affection originated in nothing better than gratitude, or, in other words, that a persuasion of her partiality for him had been the only cause of giving her a serious thought. It is a new circumstance in romance. I acknowledge, and dreadfully derogatory of the heroine's dignity; but if it be as new in common life, the credit of a wild imagination will at least be all my own. (243)

『ノーサンガー・アベイ』では挿擧は強烈であり、「ヒロインらしからぬヒロイン」の「誕生」とその「結末」という、この小説の冒頭と結末の整合性はあるものの、ある意味、オースティンの「小説論」(メタ小説)がまだ継続している観がある。この物語は作家のいわば論説によって閉じられるのである。

他方、『高慢と偏見』では、「会話」が核になっている小説であるにもかかわらず、会話に関していえば、「言わずにおく会話」で幕が閉じられようとする。

Elizabeth longed to observe that Mr. Bingley had been a most delightful friend; so easily guided that his worth was invaluable; but she checked herself. She remembered that he had yet to learn to be laught at, and it was rather too early to begin. (371)

上記はダーシーの二度目の求婚を受け入れたあとのエリザベスの心境であるが、彼女は自らの発言を抑制する術を心得ている。好人物ではあるが優柔不断なビングリーと、そんな親友に対していささか専制的傾向のあるダーシー、そうした両者の関係を揶揄したい気持ちをエリザベスはもちながらも、すんでのところで、口を滑らせることを自制するのである。率直に思いのままに発言していた主人公エリザベスでさえ、最終的には黙ることを選ぶ。「笑われたりすることはこれから学ばなければならない」——ダーシーに対するエリザベスの配慮がそうさせるのだが、彼女のほうがすでに学んでいたのは、「言わぬが花」であったかもしれない。そしてひとりエリザベスだけでなく、もうひとり、この主人公を生み出した作家自身もまた作家としての「言わぬが花」の威力を確実に学びつつあったように思われる。

オースティンは言語の原初的形態としての「同盟者間の連帯」、具体的にいえば、ここでは作家と読者、という心強い同盟者間の連帯に信をおいていただろう。創作の可能性に関しても、たとえばメルロ＝ポンティのいう“single fabric”、つまり作家と読者が協力して織り上げる「単一の織物」の存在をさらにいっそう信じるようになっていたに違いない。この作家は自らが、「著述家」であるよりは、むしろ「作家」であることを学び取り、それに徹する。オースティンが描くのは日常の些事である。しかし、それは些事でしかないわけではない。この作家はそうした人生の些事を通してむしろ人生全体を俯瞰し得るような、ある種の視座とも呼べるものを獲得してしまう。それは広い意味でのオースティンの「教育」観とも通じるものであろう。彼女のいう、あの「(幅2インチの)象牙の小片」、それが強靱な「象の牙」へと変貌する瞬間である。オースティンは自らのその真摯なメッセージを、作家独自の語りによって紡ぐ。それはまさしく、読者という、心強い「協力者」の存在を想定せずしてはなし得ない、作家としての挑戦であったことだろう。

*この論文は、2013年6月29日、日本ジェイン・オースティン協会年次大会(於 関西大学)で、『高慢と偏見』出版200周年を記念して行われたシンポジウム(統一テーマ「200年後の *Pride and Prejudice*」)での口頭発表に基づいているが、ここではその拙論における「文学における語り」の議論を「教育」にまで発展させ、大幅に加筆修正している。なお本論は、オースティンの代表傑作『高慢と偏見』にいたるまでの彼女の「作家」として成長過程を考察する関係上、すでに各拙論で発表してきたさまざまなテーマを包含するものとなり、すでに個別に議論してきている問題に関しては、ここでは詳細を避け、要点のみの呈示に留めている。

本論の議論前半の(1)は『教育研究紀要』第2号(神戸海星女子学院大学、2019年3月)に掲載しており、本紀要ではその議論の後半の(2)を掲載している。

注：

4. このダッシュウッド夫人の戦法は、いまひとりの女性のそれを思い出させはしまいか。ジャネット・ホームズの「最後の言葉」である。拙論(1)において前述しているようにホームズは「姦しきは女」という<神話>と組討ちし、その欺瞞を打ち破る見事な論展開をしたのだが、そのみならず彼女もまた「最後の言葉」を手にしたのではなかったか。しかし当然ながらそのニュアンスはダッシュウッド夫人の場合とは異なる。ホームズは男性のほうが饒舌である例を多数挙げながらも、結論としては、前述したような「攻撃は最大の防御」式の戦略のほうは放棄している。彼女は「饒舌なのは、むしろ男たちのほうである」とは断言しない。この研究者の視線は、そうした男女間の饒舌の頻度という量的な単純比較であるよりは、むしろ饒舌の質の相違にまで到達している。「饒舌」という一つの現象の向こうに、むしろ男女の本質部分を探りあてているのである。「饒舌なのは、男たちのほうである場合もある」(“... the question ‘Do women talk more than men?’ can’t be answered

with a straight 'yes' or 'no'. The answer is rather, 'It all depends.' ”) (48)。

現代のフェミニストであるこの研究者は、18 世紀の才媛、ウルストンクラフトとは違っている。女子教育の必要性を主張したウルストンクラフトの論争にみられるような、極端でセンセーショナルな勢いや華々しさは、ホームズの結論にはない。しかしホームズのこの “It all depends.” という言葉がもつ平衡感覚に現代人は彼女の「良識」をみる思いがする。1792 年、ウルストンクラフトがグレゴリーに反駁して「女性にもまず良識を得させよ」と要請したのだが、その後 200 余年を経て、女性が獲得すべき、まさしくその「良識」は、ここ、つまりホームズの結論にすでに見出されるように思われる。

5. この点では、ダンバーの進化人類学的研究は、前述したようなホームズが社会言語学的手法を駆使して得た結論をいくぶんサポートしているように思われる。以下にダンバーの仮説を一部引用しておく。

Taken together, these findings suggest that female bonding may have been a more powerful force in human evolution than is sometimes supposed. If so, then the pressure to evolve language may well have come through the need to form and service female alliances, as Chris Knight suggests, rather than through either male bonding or male activities, as conventional wisdom has always assumed. (150)

さらにダンバーは、「姦しきは女」神話と果敢に闘うホームズ自身が、ダンバーの言葉通り「同盟者間の連帯感」を味わうにちがいないようなことも述べている。

In effect, humans were now exploiting the greater efficiency of language as a bonding mechanism to allow themselves to live in larger groups for the same investment in social time. . . . A study of the Kapanora tribe in New Guinea, for example, found that *men spent on average of 3.5 hours and woman around 2.7 hours.* (115-16, emphasis added)

6. オースティンが、ジョンソンのものとされるこの一節を知っていたかどうかについて確証はない。しかし彼女はジョンソンのことを “my dear Dr. Johnson” と明言 (8-9 February 1807) しており、また “Boswell’s ‘Tour to the Hebrides’ ” も入手。さらに、上記に引用したジョンソンの一節が記されているボズウェル著の “Life of Johnson” も手に入れようとしていた (25 November 1798)。そうしたことはオースティンの書簡からも明らかである (*Letters* 121, 22)。
7. ちなみに、後期作品では会話の実験はさらに多様化し、巧妙なものになっていく。たとえば、後期第一作、『マンズフィールド・パーク』 (*Mansfield Park*, 1814) では、“quiet auditor” としてひたすら耳を傾けるファニー・プライス (Fanny Price) という主人公の設定があり、次作『エマ』 (*Emma*, 1815) では、この作品を探偵小説たらしめる謎を醸し出すものとして、会話が重要な役割を果たしている。たとえば、そこでは、フランク・チャーチル (Frank Churchill) は主人公のエマ・ウッドハウス (Emma Woodhouse) 相手に話しながら、同時に彼の秘密の婚約者ジェイン・フェアファックス (Jane Fairfax) とともに、堂々と大声で内緒話ができるといった芸当を披露することになる。
また、オースティン晩年の『説得』 (*Persuasion*, 1817) では、主人公アン・エリオット (Anne Elliot) は、第三者 (Captain Harville) に話しながら、会話の外にいるフレデリック・ウェントワース (Frederick Wentworth) に思いを伝え、愛の告白すらしてしまう。アンの < 真実 > の聞き手

であるウェントワースは、アンと第三者の会話をそばで漏れ聞きながら、会話と同時進行的に、自らの心境をアンへの手紙に吐露していく。『高慢と偏見』には、後期作品にいたってさらに巧妙化していくこうした「会話」を軸にした語りの技法の萌芽のようなものが随所にみられるようになる。

Works Cited

- Austen, Jane. *Northanger Abbey and Persuasion. The Novels of Jane Austen* vol.5. 1923. Ed. R. W. Chapman. London: Oxford UP, 1975.
- . *Pride and Prejudice. The Novels of Jane Austen* vol.2. 1923. Ed. R. W. Chapman. London: Oxford UP, 1976.
- . *Sense and Sensibility. The Novels of Jane Austen* vol.1. 1923. Ed. R. W. Chapman. London: Oxford UP, 1976.
- . *Jane Austen's Letters*. 1995. Ed. Deirdre Le Faye. Oxford UP, 1997.
- Barthes, Roland. *A Lover's Discourse: Fragments*. Trans. Richard Howard. New York: The Noonday Press, 1989.
- Boswell, James. *The Life of Samuel Johnson*. 1791. Hertfordshire: Wordsworth, 2008.
- Dunbar, Robin. *Grooming, Gossip and the Evolution of Language*. London: Faber, 1996.
- Garrod, H. W. "Jane Austen: A Depreciation." *Essays by Diver's Hands*. vol. 8. Ed. Laurence Binyon. London: Oxford UP, 1928.
- Gaylin, Ann. *Eavesdropping in The Novel: From Austen to Proust*. Cambridge: Cambridge UP, 2002.
- Ghent, Dorothy Van. *The English Novel: Form and Fiction*. New York: Holt, Rinehart and Winston, 1953.
- Holmes, Janet. "Women Talk Too Much." *Language Myths*. London: Penguin, 1998.
- Le Faye, Deirdre. *Jane Austen: A Family Record*. 2nd. ed. 1989; Cambridge: Cambridge UP, 2004.
- Merleau-Ponty, Maurice. *Phenomenology of Perception*. Trans. Colin Smith. 1962; London: Routledge & Kegan Paul, 1981.
- Page, Norman. *The Language of Jane Austen*. Oxford: Basil Blackwell, 1972.
- 惣谷美智子 『ジェイン・オースティン研究—オースティンと言葉の共謀者達』 東京：旺史社、1993。
- . 「“Is Jane Austen ‘A Slip of a Girl’” ?—ガロッド / チャプマン論争を発端として(1)~(4)」『英語青年』第 154 卷第 8 号~第 11 号。研究社、2008~2009。
- . 「スローモーションで読む“Henry Hastings”—Charlotte Brontë 習作における冒険 (3)」『Web 英語青年』第 157 卷第 12 号。研究社、2012。